

ペルセポリス

2007(平成19)年11月26日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本＝マルジャン・サトラビ、ヴァンサン・パロノー／原作（グラフィック・ノベル）＝マルジャン・サトラビ『ペルセポリス1・2』（バジリコ刊）／声の出演＝キアラ・マストロヤンニ／カトリーヌ・ドヌーヴ／ダニエル・ダリユー／サイモン・アブカリアン／フランソワ・ジェローム／ガブリエル・ロベス（ロングライド配給／2007年フランス映画／95分）

……カンヌ国際映画祭で1本のアニメ映画が大喝采を。かつてのペルシャの都市「ペルセポリス」をタイトルにしたこの映画の原作は、イラン人女性を書いたグラフィック・ノベル。1978年の王政打倒運動、1988年から8年間続いたイラン・イラク戦争など、現在核開発問題でアメリカと対峙しているイランの近年は激動の歴史。そんな中、1人の少女はどのようにして大人になり、そんな現実に対してどのように立ち向かってきたの……？ 平和でノー天気な日本の若者たち必見の映画だと、私は思うのだが……。

これは一体何の映画……？

『ペルセポリス』は、2007年の第60回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門で審査員賞を受賞し、製作国であるフランスで大ヒットを記録したアニメ映画。また、その原作となったのは、イラン人女性であるマルジャン・サトラビが書いた自伝的なグラフィック・ノベル『ペルセポリス』。

イラン（正式にはイラン・イスラム共和国）は、現在核開発問題をめぐって、アメリカが最も頭を悩ます存在となっているが、日本人にはかなり遠くて理解しにくい国。しかし、フランスなどヨーロッパの国々は中東問題に関心が強いから、1978年以降のイランの激動の歴史の中で翻弄されながら、しっかりと生きてきた若い女性の姿に興味をもったのは当然かも……？ 最近日本では、ケータイ小説やコミック誌を原作とした軽薄短小な恋愛モノが次々と映画化されているが、この『ペルセポリス』はそんなレベルのグラフィック・ノベルとは全然違うもの。まず、映画『ペルセポリス』

はアニメながら、そんなお固い映画だということを認識することが大切だ。

ペルセポリスとは……？

プレスシートによるとタイトルの「ペルセポリス」とは、ギリシャ語で「ペルシャの都市」という意味とのこと。古代ペルシャ帝国を象徴する都ペルセポリスはアレキサンダー大王の攻撃によって廃墟と化し、現在は世界遺産に登録されているとのこと。

舞台はテヘラン

9歳のマルジャン（愛称マルジ）が父エビ（サイモン・アブカリアン）、母タージ（カトリーヌ・ドヌーヴ）と住んでいるのは、ペルセポリスではなくイランの首都テヘラン。そのテヘランのまちは今「国王を倒せ！」というデモ行進であふれかえっていた。白黒のモノクロームのアニメ映画に登場する「反政府主義者」「共産主義者」等々の言葉は、平和でノー天気な日本人にはあまりにも刺激的だが、1978年当時のイランがそんな政治状況であったことは厳然たる事実。

そして、パパのお兄さんであるアヌーシュおじさん（フランソワ・ジュローム）は王政打倒によって牢獄から解放されることに。ところが、新イスラム共和国樹立にもかかわらず、元反政府主義者であったアヌーシュおじさんはまたまた逮捕されることに。そして1980年には以降8年間も続くイラン・イラク戦争が勃発し、両国とも甚大な被害を受けることに。

キーウーマンはおばあちゃん

1969年生まれのマールジャン・サトラピがこんな自伝的な物語を書き、映画化まで実現する原動力となったのは、何よりもマールジャン・サトラピ自身が小さい時からもっていた感受性と好奇心。「なぜ〇〇なの？」「どうして△△ではダメなの？」と疑問に思うことが子供が成長していくうえで最も大切だが、マールジャンはその点小さい時からトップだったよう……。もっとも、そんなタイプの子供はどこでも衝突や軋轢を生むのが当然だから、両親がマールジャンをイランからオーストリアのウィーンに留学させようと決心したのは、激動するイランの中にこんな勘の鋭い子を置いておいてはヤバイと考えたため……？

そんなマールジャンに対して、「常に公明正大であれ」「恐れが人に良心を失わせる。

恐れが人を卑怯にもする」と教えるおばあちゃん（ダニエル・ダリュー）の毅然とした生きざまと存在感は圧倒的で、この映画のそしてマルジャンにとってのキーウーマンは、このおばあちゃん。

まさに波瀾万丈 パート1

マルジャンがウィーンに留学したのは1983年頃だから、彼女が14歳の時。スクリーン上ではそこから始まる住居、友人、遊び、勉強、恋をめぐるマルジャンの波瀾万丈の人生が描かれていくから、それは是非あなた自身の目で。

しかし、結論としてウィーンのまちや人々がイラン人のマルジャンに対してやさしくなかったことはまちがいないようだ。お金も宿もなく、飢えと寒さで苦しむマルジャンは遂に血を吐いて路上で倒れてしまうことに。病院で目覚めたマルジャンが両親に電話をかけた時、両親は2カ月も音信不通になっていた娘に対して、「何も聞かないから帰っておいで」と温かい言葉を……。

まさに波瀾万丈 パート2

てなわけで、マルジャンはテヘランに帰ってきたが、イラン・イラク戦争後のイランが大きくサマ変わりしていたのは当然。そんな中、落ち込んでしまったマルジャンは、うつ病と診断されたり、神サマとの出会い（？）があったり、大学の美術学部に入學したり、新しい恋と結婚を実現したり、と波瀾万丈のパート2が展開される。

その挙げ句、マルジャンは再びヨーロッパのパリに立つ決意を。映画はここで終わるが、マルジャンの波瀾万丈の人生パート3が、再びパリのオルリー空港に到着した時から始まったことは言うまでもない。

もう少し論点整理が欲しかった……？

映画が始まるや、1978年当時のイランの政治情勢がマルジャン自身はもちろん、マルジャンの両親やおじさんたちを通して明らかになる。しかし残念ながら、マルジャンがウィーンに留学している間のイランの政治・軍事情勢は、この映画ではあまり詳しく描かれていない。それは、マルジャンがテヘランに帰った後も同様。もっとも、スカーフの強要や革命防衛隊によるさまざまな規制と検閲等、マルジャンが感じる問題点はいろいろと表現されているが、それ以上に客観的な論点がきちんと提示されな

いのが私には少し不満……。

なぜ私がそう思うのかというと、もともとイランの政治情勢に疎い私たち日本人としては、この映画からできるだけそんな情報を仕入れたいと願っているから。少女時代のマルジャンはいつも「なぜ〇〇?」「なぜ△△?」と質問していたのだから、成人してからのマルジャンがイランのあらゆる状況に対応してさまざまな疑問と問題意識をもっていたことは明らか。したがって、マルジャンの恋や結婚、離婚という心情面のみならず、もう少し客観的な政治・軍事情勢についての彼女の「なぜ〇〇?」「なぜ△△?」をもっと聞かせてほしかったと私は思うのだが……。

2007(平成19)年11月26日記

ミニコラム

せんぶ社会のせい？

9歳の少女アンナが急速にキョーサン(共産)化していく両親の姿を見て、「ぜんぶ、フィデルのせい」と考えたのは当然。しかし結果的に、アンナはフィデルに責任転嫁することなく、自分の頭で考え、自分の足で歩こうと決意したから立派なもの。それに対して、08年6月8日、秋葉原で無差別殺傷事件を引き起こした25歳の加藤智大容疑者の考え方は？

レンタカーで交差点へ突っ込み、その後ナイフを振り回しながら無差別殺傷行為に及んだのは、すべて計画的だったが、彼は「生活に疲れ、世の中がいやになった。人を殺すために秋葉原に来た。誰でもよかった」と供述している。さらに携帯サイトへの書き込みを見ると、両親への不満、職場への不

満、残業への不満、彼女ができないことへの不満、顔への不満、無視されることへの不満など、不満、不満のオンパレード！これをきれいな言葉でまとめると、社会への絶望感と人間としての疎外感がこの凶悪な犯行の本質となるのかも……？しかし、ちょっと待ってくれ。彼がこんな凶悪な犯行に走ったのは、ぜんぶ職場のせい？ぜんぶ社会のせい？したり顔でそんな風に言うコメンテーターが多いからこの国は困ったものだ。

そうじゃないだろう。大半はお前自身の人間形成の問題だろう。私はそう強く訴えたい。だって、9歳のアンナだって「ぜんぶ、フィデルのせい」にできなかったのだから。

2008(平成20)年6月20日